



チア部に入った巨乳の幼なじみ
えちえちエールでいるんな部活を応援しちゃう

原作 Crimson CROWN
午前央人

クラスメートの由紀に誘われて
チア部に体験入部したナオ
でもそのチア部の活動は
彼女の想像とは違って

チア部に入った巨乳の幼なじみ。

えちえちエールでいろんな部活を応援しちゃう

目次

前奏く幼なじみは友達以上セフレ未満	4
序くチア部への誘い	20
第一部 体験入部く応援するってそういうこと!?	40
ケース1 .. 野球部の応援く高松由紀の場合	41

前奏く幼なじみは友達以上セフレ未満

「んんんっ！ あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

「はあ、はあ、はあ、はあ、くっ。ううっ！」

ホテルのベッドの上で、四つん這いになった浅井ナオと幼なじみの柿谷真人が、バックスタイルで繋がっていた。

「んっ、んううううっ：：はあ、はあ：：くっ、うううううっ」

二人から発せられるのは荒い呼吸と喘ぎ声ばかりで、交わす言葉はほとんどない。

「んっ、うっ：：んんんっ：：はあ、はあ、はあ、はあ：：んっ、あっ！ あああああっ」

真人が腰を動かす速度が徐々に早くなっていく。

快感が高まってきたのか、さらにナオに覆いかぶさり密着していく。

「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、ん、ん、ん、ん、ん、あ、はっ、あっ、はっ、あっ、ああああんっ、んっ、んっ、んっ、ん、ん、ん、ん、あ、はっ、あっ、はっ、あっ、ああああ

あああああっ」

突かれている方のナオも、グーッと背を反らしはじめる。

真人は近づいてきたシミひとつないその背中に、チュツチュと唇を這わせた。

「んっ、ちゅっ：：れる：：はむ：：ん：：」

その行為で、若干腰の動きは鈍くなる。

だが、それを補うような快感が真人のキスによってナオの背中に発生した。

「んんんんっ」

その感覚に、ブルルツとナオが背中を震わせる。

ナオの肩甲骨に沿って這う、男にしては柔らかい真人の唇。

その唇から生み出される微妙な快感は、ナオの弱点の一つだった。

「はあああああ：：あっ、ああああああっ：：んっ、んんんんっ」

追い打ちをかけるように、真人の舌がナオの首筋を下から上へと舐めあげる。

「くううんっ：：んっ、ふっ、んっ、んんんんっ」

湧き上がる快感で、ナオのおまんこが締まる。

締まったおまんこが、真人に快楽を与える。

「うううっ！　くっ、うっ、うっ、うううっ」

気持ちよさに眉をしかめながらも、真人は腰を振り続けた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ！」

ナオの声が一段階高くなった。

どうやら、絶頂が近いらしい。

それに応えるように真人もまた腰をさらに早く、そして深く打ち付けはじめた。

「んあっ！ はっ！ あっ！ あっ！ あんっ！ あっ！ んんんんっ！」

真人がナオのウエストに腕を回す。

しっかりとホールドし、腰を密着させ、ちんぽを一番深い部分まで突き刺した。

「んくうううううっ」

子宮の入り口まで届く挿入に、ナオは首を反らした。

その勢いを利用するかのようになり、真人はその体勢のまま背後にゴロンと倒れる。

「んっ、え？ あっ、ちよつと……くうううううんっ！」

後背位から騎乗位への体位の変化。

重力に引かれ、ナオの尻が真人の下腹部に密着する。

グチュリと水分多めの卑猥な音を立てながら、真人のちんぽが根元までずっぼりとナオ

の中に埋め込まれた。

「す、ご……奥、まで……入って……うううううっ」

すでにイキそうになっていたナオは体位の変化で一息ついたものの、少しでも動けばすぐに絶頂を迎えてしまいそうになっていた。

だが、真人は容赦しない。

「んふううううっ！ くっ、うっ、ふっ、んっ、んっ、んっ、んんんんんんっ！！！」

ベッドのシーツをしっかりと握りしめ、渾身の力でナオに向かって腰を突き上げる。

その勢いはバックで突いていたときよりもさらに激しい。

弓なりに反り返ったときにできる彼とベッドの間の空間が、その振幅の大きさを物語っていた。

「あっ、はっ、やっ、はっ、あっ、はっ、あっ、くっ、うっ、うううううんんっ！」

彼の身体の上で、ナオがダンスを踊らされている。

揺れる長い髪と大きな胸。

その胸の動きを抑えるためか、それとも快楽を貪るためか、彼女の手はその大きな乳房にしっかりと重ねられていた。

指の間からは、固く勃起した乳首が見えている。

真人が腰を突き上げるたびに、彼女の手にも力が入る。

柔らかな乳房に指が食い込み、その間にあった乳首もきつく締め付けられていた。

「んはああああっ！ あっ、はっ！ あっ、あっ、あっ、あああああっ」

ナオの方も、跳ねるように動きはじめる。

ナオが感じれば、真人の快楽が高まり、真人が感じれば、ナオの快楽が高まる。

粘膜同士でつながる二人の間で、気持ちよさがループしていた。

そしてその気持よさは、ループすればするほど高まっていった。

「っ、ふっ、くっ、うっ！」

ナオのおまんこの内側は、真人のちんぽの気持ちいい部分を確実に刺激してくる。これはどちらも、当然といえば当然のことだった。

真人もナオも、お互いの身体でしかセックスを経験していなかったのだから。

ナオが知っているのは真人のちんぽだけだったし、真人が知っているのもナオのおまんこだけだった。

セックスのたびに、二人は成長していく。

真人のちんぽはナオに、ナオのまんこは真人に、それぞれにフィットするように、少しずつ形が整っていった。

それゆえに二人の身体は、お互いの感じる場所を的確に刺激しあえるように、無意識のうちに成長していた。

もちろん、知識としての成長もある。

ここをこうすればこうなる、こうしたらもっと気持ちよくなる。

そんな風に試行錯誤しながら、お互いの身体で性の知識を積み重ねてきたナオと真人。恋人同士でなかったことが、より一層その体験を加速させたのかもしれない。

幼なじみという気安い関係が、相手に対する余計な気遣いを無用とした。

ただ気持ちよくなるために。

もちろん相手を気持ちよくするという目的もあったけれども、第一の目的は自分のため

その衝撃が、つま先立ちになったかのようなナオの快感の背中を押した。

彼女もまた、真人とほぼ同じタイミングで絶頂を迎える。

「んはああああああああっっっ！！！」

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

二人同時に固まったあと、こちらもほとんど同じタイミングで、二人の身体から力が抜けた。

バタリと真人の傍らに倒れ込んでいくナオ。

真人は片腕で、ナオの身体を受け止める。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

天井を見上げている真人とベッドに倒れ込んでいるナオの呼吸は、まるで示し合わせたかのように、同じリズムを刻んでいた。

◆ ◆ ◆
浅井ナオと柿谷真人は幼なじみだった。

隣同士の家で育った同じ年の二人は、ほぼ生まれたときから一緒の時間を過ごしていた。それは幼稚園に入っても、小学生になってからも変わらなかった。

このころ、二人は習い事をはじめた。

ナオはバレエを、真人はサッカーを。

共働きのナオの両親と自営業を営んでいる真人の両親は、それぞれの空いている時間を補い合った。

平日の送り迎えは柿谷家が。

休日の試合や遠征は浅井家が。

まるで六人でひと組の家族であるかのように、真人とナオは育てられた。

それが変化しはじめたのは、真人よりも一足早くナオが第二次性徴を迎えたころだった。

それまで二人の体型はほとんど変わらなかった。

若干ナオの方が背が高くくらいで、二人とも同じような痩せっぽちな体型をしていた。

変化しはじめの自分の身体にナオは戸惑ったが、そこは二人いる母親たちがすぐに気づいて適切なケアをした。

表面上は、ナオと真人の関係はほとんど変わらなかった。

しかし心の中は違っていた。

ナオは少しずつ、自分と真人の違いに気づき始めていた。

家族じゃないのに、家族みたいな真人。

ホントは他人だけど、他人みたいに遠くない真人。

学校の友だちが真人の話をすると、なんだか胸がチクチクするようになってきた。

徐々にわかりはじめてくる、自分と真人の違い。

自分は女の子で、真人は男の子。

学校で保健体育の授業が行われ、ある一つの事実に気づいてしまう。

パパとママは今は家族だけれど、昔はそうじゃなかった。自分と真人みたいに。

ナオがバレエを辞めたころには、その気持ちはすっかりナオの中に根付いてしまった。

自分にとって、真人が特別な存在だという意識が。

一方の真人の方には、これといった変化はなかった。

ナオに遅れること一年ほどで、彼にも第二次性徴は訪れた。

とはいえ、まだまだ気持ちの方には変化はなかった。

ナオはナオで、女の子だとかなんだとか、これっぽっちも意識していなかった。

膝の故障で、夢中になっていたサッカーを中断しなければならなくなるまでは。

真人の膝の故障は致命的なものではなかったけれど、サッカーからの長期の離脱を必要とするものだった。

そしてそのあとには、キツいリハビリが。

とはいえリハビリさえすれば、普通にスポーツができる身体に戻れると医者は保証してくれた。

ところが真人は、安静にしていなければならぬ期間が過ぎても、リハビリを開始しなかった。

スポーツどころか外に出かけるようなこともほとんどせず、部屋に閉じこもりボーツとする毎日。

時間が解決するだろうと楽観視していた両親たちも、その状態が一週間も続くとさすがに心配になってきてしまった。

そこで、ナオにお鉢が回ってくる。

真人にきちんとりハビリを受けるよう説得してくれと、彼の両親が彼女に頼んできた。ナオの両親も、そうすればサッカーもまたできるようになるからと、彼女の背中を押す。

そんな両親たちの言葉を受けてか、ナオは頻繁に真人の部屋を訪れるようになった。とはいえ彼女は、真人にリハビリを強要したりはしなかった。

基本的にはただ一緒にいて、同じ時間を過ごすだけ。

真人の部屋を訪れて今日一日あったことを話したり、真人のPCで動画を見たりゲームをしたり、ときには何もせずただ部屋にいて本を読んだり宿題をしたり。

ともかくナオは、閉じこもりがちになってしまった真人に寄り添った。

それはナオなりの真人への信頼の表れであり、真人の性格を理解しているがゆえの行動だった。

真人は押し付けられたら反発するタイプ。むしろ何も言わないほうが、プレッシャーを感じて自分から勝手に行動をはじめめる。だから必要なのは、そばにいてくれることだけ。それが、両親たちからの要望に対するナオなりの解答だった。

そうこうしているうちに、徐々に真人の行動はアクティブさを取り戻していった。

まずは近所のコンビニや公園。そしてバスや電車で少し離れた繁華街へ。

そのうち遊園地とか映画とか、まるでデートっぽいところへのお出かけも増えてきた。

だがそれらは真人の選択ではなく、ナオの希望。

自分の時間を削って真人に付き合ってるんだから、それくらいの役得があってもいいじゃない、というのがナオの言い分だったが、次第に真人の方もナオとの外出を楽しむようになっていった。

そして二人は、少し不思議な関係になる。

友達以上恋人未満の関係から、幼なじみ以上セフレ未満の関係へ。

それは遊園地からの帰り道だったか、映画からの帰りだったかは、二人ともあまりハッキリとは覚えていなかった。

それというのも、あまりにも自然な流れでそうなってしまったから。

どちらからともなく手をつなぎ、無言のままホテルに入り、一人ずつシャワーを浴びて、まるでそうなるのが当然だったかのように唇を重ねた。

「んっ、くううううっ……んんんんんっ！」

ナオの処女膜を、真人の勃起したちんぽが破った。

激しい痛みを唇を噛み締め、シーツをきつく掴むナオ。

一方の真人は、これまで感じたことのないような感触をちんぽに感じていた。

あたたかく、柔らかく、自分を包み込んでくれるような感覚。

はじめて同士だったためにそれほどうまく準備ができていなかったが、ナオはそれなりに濡れていた。

とはいえやはり、それは十分ではなく、真人が動くたびに激しい痛みがナオを襲う。

「くっ、うっ！んんっ、くっ！うっ、っ、っ、っ、っ、っ」
声にならないうめきをナオは断続的に漏らす。

そのリズムは当然のことながら、はじめてにしてはそれなりに様になっていた真人の腰の動きとシンクロしていた。

「あっ、くっ、ううっ、くっ、ふっ、んっ、んっ、んっ、んっ」

しかしながら、その苦しい時間はそれほど長くは続かない。

なぜなら早くも真人の方に限界が訪れつつあったからだ。

もともと頻繁にオナニーをする方ではなかった真人にとって、ナオの中の感触はあまりにも気持ちよすぎて、それほど長くは耐えられなかった。

柔らかくあたたかで、そしてきつく締め付けてくるナオのおまんこ。

五分と経たずに、真人は限界を迎えてしまった。

「くううっ！」

射精の瞬間、真人はちんぽを引き抜く。

その手のことには比較的疎い方ではあったが、そのまま中で出してしまったのはマズイことくらいは理解しているようだった。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

上下する下腹部を幼なじみの精液で汚しながら、ナオが激しく息を切らしている。

そんなナオを見下ろしながら、真人はポツリポツリと自分の心情を語り始めた。

どうせリハビリしても、その間にできた差は絶対に埋められないという諦め。それが、

彼のやる気を完全に削いでしまっていた。

が、そんな彼の気持ちにも変化が生じていた。

その原因は、このところのナオとのお出かけ。

思っていた以上に、自分の体力が落ちていた。

ナオと一緒に出かけると、自分の方が先に疲れてしまう。

同じ距離を走っても、以前よりもずっと早く息が切れてしまう。

そんな事実が、このままじゃいけないと彼に思わせるようになっていた。

ナオは身体を起こして、真人を優しく抱きしめる。

「まずは第一歩だね。がんばれ真人。応援してる」

ナオの信頼が、真人をリスタートさせた。

真人なら自分で考えて答えにたどり着くだろうという信頼。

その信頼が、諦めきっていた真人を再び立ち上がらせた。

——この日から真人は、きちんとリハビリに通いはじめた。

そうして忙しくなり、ナオとのデートっぽいお出かけは少しずつ減り始めた。

とはいえ、すぐにゼロになったわけではない。

何度も二人は一緒に出かけて、そしてそのたびに身体を重ねた。

リハビリは順調に進んだ。

担当したスタッフが驚くほどの速度で、真人の膝は回復していった。

そして彼が再びグラウンドに立てるようになったころ、いつの間にか二人の関係は元に戻っていた。

あの濃密な時間が、すべてなかったかのように。

その理由は二人にもわからなかった。

はじまったときと同じ様に、ごく自然に。

そうなるのが当然だったかのように、二人の距離感は一瞬に戻っていった。

そして――季節が変わった。

序　チア部への誘い

春。

同じ学校に進学したナオと真人は、やはり縁があるのか同じクラスになっていた。

そんな二人の距離感は、一時はあれほど親密な関係だったとは思えないほどに普通なものだった。それこそ、知らない者からすると二人が幼なじみだとも気づけないほどの。

そしてこのクラスには、ナオの昔なじみがもうひとりいた。

高松由紀。

真人とも知り合いの彼女は、彼とナオとの関係もある程度は把握している。

しかしながら、だからといってどうということもない。

なぜなら彼女は、かなり自分本位に行動するタイプで、周りのことはわりとどうでもいいと思っっているタイプだったからだ。

そして今日も、そんな彼女は自分のしたいことのために行動していた。

「ほら、ナオ。一緒にチア部やろうよー」

休み時間にナオの席に張り付き、迷惑そうな表情を浮かべるナオに、しつこいほどの勧誘を続けていた。

彼女が入るつもりである、チア部へと。

「やだ」

ひとの机にへばり付き、甘えるような表情でこちらを見上げ、制服の袖を引いてくる由紀から顔をそむけながら、ナオは紙パックのジュースをストローでズーっと吸った。

「ええりりっ、いいじゃーん」

そんな明らかな拒絶にも、由紀はめげない。

それどころか、さらに攻勢を強めてくる。

「その無愛想もニッコニコになっちゃうよー」

さらに距離を詰め、ナオに向かってその手を伸ばしてくる。

そしてナオの頬を指先でつまみ、グイーツと強引に口角を上げてきた。

「……」

無理やり笑顔にされたナオは持っていたパックのジュースを机の上に無造作に置くと、空いた手で由紀の顔を左右から挟み込んだ。

「由紀だけ入部すればいいでしょ」

ぐりぐりと両頬を押し込まれながらも、由紀はさらに勧誘の言葉を連ねていく。

「だってナオ、昔バレエやってたんでしょ？」

意味のわからない由紀の言葉に、ナオは一瞬キョトンとする。

「それとチア部が何の関係があるのよ」

わからないままに由紀に尋ねてはみたが、返ってきた答えもまた、ナオには意味がわからないものだった。

「どっちも踊る」

「あのねえ……」

確かにナオは幼いころバレエを習っていた。と言っても、本格的にその道のプロを目指したりとか、そういうものではない。何かナオに習い事をさせようと両親が考えたときに、たまたま母親が思いつき、それを父親が受け入れ、ナオがきれいな衣装が着たいという単純な理由で首を縦に振った。ただ、それだけのことだった。

とはいえ真面目な性格のナオは、そんな理由ではじめたバレエであっても、しっかりと練習に取り組み、それなりの成果を残した。

全員参加の舞台はもちろん、選抜メンバーだけが出る発表会などでもオーディションで勝ち残り、バレエ教室の先生からも将来有望だと目をかけられていた。

ただ、残念ながら彼女の身体がバレエ向きではなかった。

成長するにつれ、豊かになっていく彼女の胸。

太りやすい体質も、バレエを続けるにはあまり有利ではなかった。

真面目に取り組んではいたものの、特にバレエに対して強い思い入れもなかったナオは、割と簡単にバレエを辞めることを決めた。

体型のこともあったが、学校の勉強が忙しくなってきたことも理由の一つにあった。何度か娘の舞台を見たことで満足していた両親も、ナオのその判断をごく簡単に受け入れていた。

一番の壁はバレエ教室の先生かもしれないとナオは思っていたが、割とあっけなく先生もその決断を受け入れてくれた。

それどころか、そうした方がナオの将来のためでもあると喜んでくれたりもした。厳しい現実でもあったが、ナオくらいの才能の持ち主であればそれほど珍しいものでもなかったのだ。無理して続けるよりは、もっと向いているものを探した方がいい。バレエ教室の先生の判断は、そういうものだった。

そんな細かい経緯は知らない由紀は、勝手な想像と思いつきでナオがバレエを辞めたことと、チア部の活動を強引に結びつけていく。

「途中でくじけちゃったらしいけどさ、今度はそういう人を応援する側やってみなよ」当然のことながら、由紀のその言葉はこれっぽっちもナオには響かなかった。

ナオには自分がくじけたという感覚はなかったし、バレエを辞めたのも自分の意志で決めたことだったし、辞めたことによって空いた時間もそれなりに充実したものだだった。ただ『そういう人を応援する側』という言葉には、少しだけ気持ちが動いた。

なぜならそれは、彼女と真人の昔の関係を思い出させる言葉だったから。

だが由紀は、ナオの気持ちがそんな風に動いたことにはまったく気づかない。

真人とナオの間に何かがあったことは知っていた。

知っていたが、それがどういうものかは聞いてはいなかった。

ナオからも、真人からも。

ナオと昔からの知り合いとはいえ、幼なじみである真人ほど深い付き合いがあったわけではない。

ただ単に幼稚園や小学校が同じだっただけ。

家もそれほど近所ではなく、お互いの家を行き来するようなこともほとんどなかった。

由紀とナオとの関係は学校でのものがほとんどで、放課後途中まで一緒に帰ったり、年に何度か友人たちで集まってどこかに出かけるときに優先的に声をかけたりする、その程度のものであったのである。

しかしそれでも、新しい学校に進学し、前の学校からのつながりが減った現時点では、一番親しくしている同性の友人であるということに変わりがなかった。

ナオにとっても由紀にとっても、お互いが今のところは一番親しい友人ではあったのだ。

まあ、人付き合いのあまり得意ではないナオと違って、由紀は着々と知り合いを増やしつつはあったが。

「スタイルいいんだし、みんな喜ぶよ？　このバインバイン」

そう言いながら由紀は、おもむろにナオのバストを揉んだ。

「ぶえっ」

再び口にしていたジュースを、思わずこぼしてしまうナオ。口端から垂れてしまったそれは、由紀が持ち上げていたナオのバストにオレンジのシミを作った。

「むにゅむにゅむにゅと。うーん、また大きくなったんじゃないの？ やっぱりこれ、活かさないもったいないよ」

「活かすってどういうことよ。っていうか、ひとの胸勝手に揉むのやめなさい」

「よいではないか、よいではないか。ほれほれ」

「あ、んっ……って、こらっ」

「ぐえ」

ゴツンと、かためた拳で由紀の頭を軽く叩くナオ。

由紀は頭を抱えながら小さく唸り、ナオから離れていく。

「いててて」

思った以上に痛がる友人の様子に、ナオはちょっとだけ心配になってしまう。

「ご、ごめん。軽くやったつもりだったんだけど、そんなに痛かった？」

「うー、なんかいいところに入ったみたい。記憶が一つか二つ消えたかも」

「え、そんなに？」

「だからチア部に……」

そこでナオは思い出した。彼女の友人が、かなりしたたかだということ。

「由紀それ……痛いふりしてるだけでしょ？」

ジト目で睨みつけ、由紀の頭を押さえる手を引き剥がす。

そこには心配したようなコブが出来たりはしていないし、当然のことながら傷がついたりもしていない。

もちろん多少は痛かったりはしただろうが、それはナオの想定を上回るようなものではないはずだ。

それを表すかのように、彼女の友人はぺろりと舌を出した。

「バレたか」

「まったく」

ボヤきながらナオは、カバンの中からウェットティッシュを取り出す。

それを一枚手に取り、ブラウスについたオレンジジュースを拭き取りはじめる。

「いやあ、それにしてもホントに立派に育ったよね。小学生のころは私とそんなに変わらなかつたのに」

ナオの正面に陣取り、机に肘をついて無遠慮に友人の胸を覗き込む由紀。

マジマジと見つめる彼女の目の前で、ナオの胸が揺れていた。

「いつの話してるのよ。っていうかあのころに比べれば、あんたの胸だって大きくなって
るでしょ？」

ナオの言葉を受け、自分の胸を見下ろす由紀。その視線の先には、ナオほどの膨らみは
存在してはいなかった。

「そりゃまあ……少しはね」

「ほらあ」

「でもあのころのブラ、私まだ着けられる」

「え！？」

「ナオは無理でしょ？」

「それは……まあ、うん」

友人の衝撃的なひと言に、ナオは言葉を濁すしかなかった。

ナオが思っていたよりも、由紀の胸は育っていなかったらしい。

多少大きくなって見えたのは、もしかしたら彼女自身の成長ではなく、下着
の方が成長したおかげだったのかもしれない。

メーカーの企業努力の成果か、下着の進化はめざましい。

ただ着けただけで、カップ数が一つか二つくらい上げられるブラすら存在する。

ナオは基本的に形を整えるようなサポートをブラから受けているだけだったが、由紀は

そうではないのかもしれない。

小学生のころの下着をまだ着けられる。その話が、本当なのであれば。

「で、これは一体どのくらい育ったの？ E？ F？ 前に下着買いに行ったときはギリギリEだったよね？」

またしても由紀がナオの胸を勝手に揉んでくる。

むにゅむにゅと自由自在に形を変えるそれは、彼女の手には収まりきれないほどの大き
さだった。

「どっちでもない」

友人に胸を揉まれながら、ナオはブラウスについたシミを拭き取っていた。

裏側に折りたたんだティッシュを押し当て、表側からウェットティッシュでポンポンと叩く。

オレンジ色のシミは少しずつ薄くなっ
てはいたが、完全には取れそうにはな
かった。

「は？」

「G」

「え？」

「Gになってた」

「ちょ……Gって」

自分で聞いたくせに、由紀は驚きで固まっていた。

「FでもすごいのにGって……ちよつと分けるこのやるー！」

「うわっ！」

由紀がさらに激しくナオのバストを揉みしだく。

それはもうむにゅむにゅというレベルを超えて、ムギユムギユと言ったほうがいくらの激しさに達していた。

「いい加減に——」

再びナオの拳が振り上げられた。

それが由紀の頭頂部に振り下ろされる直前、彼女の耳に聞き慣れた声が聞こえてきた。

「相変わらず仲いいな、ナオと高松は」

「ゲツ、真人……っ」

振り向いたナオの動きが固まった。

そして彼女の胸に手をやったままの由紀の顔には、ニンマリとした笑みが浮かんだ。

ぎこちない動きで、ナオは拳をゆっくり下ろす。

そしてそのまま制服のミニスカートからよつきりと顔を出した太ももの上に、揃えた両手を行儀よく置いた。

別に二人の関係は悪くなったというわけでもない。ただ単に、昔ほどの親密さを失って

しまったただけだ。

しかもそれを強く感じているのは、ナオの方だけ。

もちろん真人の方も関係性の変化に気づいてはいたが、それは自然なものだとして受け入れている部分があった。

真人にとっては以前のナオも今のナオも同じナオ。変に意識したりすることはせず、ごく自然体で接してきていた。

「幼なじみからも言ってやって。ほらほら」

真人の方に片手を伸ばし、チヨイチヨイと手招きしながら、由紀は言葉を促した。

「？」

頭の中にはなマークを浮かべながらも、意味がわからないまままで二人の方にさらに歩み寄ってくる真人。

ナオはさらに、気まずそうな表情を深めていく。

「なんのことだ？ 俺が何を言えばいいんだ？」

由紀がかなり簡潔に事の次第を真人に説明した。

ナオが黙っているのをいいことに、かなり自分に有利な感じに話を改変しながら。

「へー。いいじゃないか。やってみろよナオ。そういうえげうちのサッカー部の部長もチア部の応援すげーって言ってたわ。ナオがチアやってるところ俺も見たいしさ」

かなり気軽に真人はナオにチア部への加入を促してしまふ。

そこが、どんな風に各部を応援しているかを知らないままに。

「おもしろがってない？」

「んなことねーよ」

振り返りつつ上目遣いで背後から近づいてきていた真人を見上げながら、ナオがいぶかしげに言う。

その頬がうっすらと朱に染まっていることは本人以外は気づいていない。

そしてその朱は、真人の言葉でさらに濃くなった。

「ナオが応援してくれたら俺も嬉しいし」

「……」

友人の顔色の変化に由紀が気づく。

事態が自分の思惑どおりに進みそうだと、小さくほくそ笑む。

そしてさらにナオの気持ち揺さぶろうと言葉を連ねた。

「柿谷くん、サッカー部入ったんだ。そういえば小さいころからサッカーやってたもんね」

「まあな。途中ちよっとblankあるけど、けっこう優秀だったんだぜ」

「ふーん」

実際のところ、そのblankの間に何があったのか何となく知っていた由紀だったが、

そこは深く突っ込まない。真人もナオも詳しくは語らないし、そもそもが二人の極めてプライベートなことでもあったから。

もちろん、少しでもナオがそのことについて漏らしたりしたとしたら、激しく追求はしただろうが。

「うちのサッカー部ってけっこう強いんでしょ？ レギュラーとかなれそう？」

「うーん、どうだろう。ベンチ入りは狙ってるけど、俺以外にもうまいやつけっこういるしな」

「じゃあさ、やっぱり応援必要じゃない？ たとえば、ナオの応援とか」

「そうだな。ナオの応援には昔からよく力づけられてたからな。もし試合とか出られることになったら教えるから、応援しに来てくれよ」

若干ピントのズレた真人の返答。

しかしながらその内容自体は、由紀の求めていたものからそれほど外れてはいなかった。「だってさ、ナオ」

「……」

無言で考え込んでいるナオ。

とはいえ昔からの友人である由紀には、その考えは手に取るようによくわかった。

(チアかあーッ)

ナオの頭の中には自分がチアリーダーの衣装を着て、フレイフレイとサッカー部を応援している状況が鮮明に思い浮かべられていた。

もちろんその応援している相手は、サッカー部である。

そして、フィールド上には真人の姿が……。

「高松さんはもう決めてるの？ チア部」

「うん。そのつもり」

そんな妄想中のナオは放置し、二人は何気ない会話にまあまあ花を咲かせた。

ナオと昔なじみの由紀は、当然のことながら真人とも昔なじみだ。

幼なじみと言えるほどの親密な関係ではなかったが、会えば言葉を交わす程度には親しかった。

元とはいえサッカーエリートでそこそこ顔面も整い、いい感じに鈍感力の高い真人には、その手の知り合いがけっこう多い。そんな中でも由紀は、それなりに真人と親しい方である。

もちろんナオとの関係とは比べものにならない。

ナオにとって真人は特別な男子だし、真人にとってナオは特別な女子。

彼と彼女にとって、お互いは取り替えようのない特別な相手だった。

もつとも、それらを明確に表すような関係には二人はなっていない。

真人がサッカーから離れていた、あのとき以外は。

「じゃあもし試合に出れたら、応援に来てくれるわけか」

「だよー。そうなるはず」

「チアとかに応援されたことないから楽しみだな」

「ベンチでじゃなくて、グラウンドで応援されるようにがんばってね」

「おう」

そんなことを話している間も、ナオは妄想の中でチア部の自分を想像していた。

彼女の大きな胸にピタッと張り付くユニフォーム。

短すぎるほど短いミニスカートからは、想像の中の彼女が動くたびに白いパンツがチラ

チラと見えていた。

実際にはアンダースコートを装着することになるのだが、まだチアのチの字すら知らない今の時点では、それは彼女の生パンツであった。

もつとも、想像の中なので誰に見られることもなかったのだが。

「じゃ、俺行くね」

「じゃねー」

幼なじみがそんな妄想に浸っているとはこれっぽっちも気づかぬまま、真人は自分の席へと戻っていく。

そして同じクラスの男子たちに、何を話していたのだとからかわれる。その中には由紀やナオに密かに：：もしくはあからさまに好意を抱いている者たちもいた。正統派美少女でスタイルもいいナオ。胸やお尻の成熟具合はそれほどでもないが、ツインテールでどこか猫を思わせるわがままっぽさを漂わせている由紀。それぞれがそれぞれに、それなりの数のファンやフォロワーを獲得していた。ナオと比べて由紀の場合は、同性からは煙たがれることも多々あったが。

（うゝん：：）

ナオの妄想は次のフェイズに移行していた。あっているかどうかは別として、先ほどまではチア部の華やかな面が強調されていた。だが今の想像は違う。

彼女の脳内で展開していたのは、ツラく厳しいチア部の練習だ。昔バレエをしていたころのキツさが、頭の中で再生されている。

小さいころの彼女はそれが当然と思ってやっていたためにそれほどではなかったが、誰もがやるようなことではなかったと知ってしまった今となっては、あのころの体験はより一層のキツさをもって彼女の中で思い出となっていた。

もちろん、それは嫌な思い出というわけではなかったが、それでもその体験がキツかったというのは事実だ。

痛くてもやめてもらえない柔軟。

足の成長に追いつかず、トウシューズがキツくなってしまったのできた血豆や黒い爪。体型を維持するために甘いものを我慢しなければならなかったことも思い出された。

それが、チア部の練習と関係あるかどうかは別として。

「というわけでナオ。一緒にチア部やろうよ。ね？ いいでしょ？」

なにがというわけなでなのかは由紀自身にもわかっていなかったが、ともかく彼女は少し前とほとんど同じような体勢：：ナオの机に張り付くような体勢で、彼女の袖を引きながら友人をチア部へと勧誘していた。

「チアって：：大変なんじゃないの？」

妄想の中から帰ってきたナオが、その想像の中で体験したことについて由紀に尋ねる。

「練習とかいろいろあるでしょ？ 前に動画でちょっとだけ見たことあるけど、人を持ち上げたりジャンプしたり、私みたいにちょっとバレエをやったくらいじゃないかな」

ナオの不安を由紀は笑って吹き飛ばした。

「大丈夫だってば。っていうかそもそも、私が入ろうって言うてるんだから、そんなに激しいわけではないじゃない」

「：：：」

ナオは一瞬考える。彼女の中にあつたチア部のイメージが修正される。確かに、彼女の友人である由紀がやるのであれば、彼女が想像したような激しいものではないかもしれない。

由紀は運動神経自体は悪くない。スポーツも人並み以上にできることが多い。ただ飽き性で、練習やトレーニングのような地道なものにはめっぽう向いていない。

そんな由紀が入る部活なのであれば、それほど練習は厳しくないものと思われる。

なんちゃってチア部：：とまでは言わないが、大会などでの優勝を目指すガッツリ体育会系のアスリートな体質のチア部ではないのかもしれない。

ナオは、そんな風に自分の中のイメージを修正した。

「体験入部という手も：：」

そんなナオの背中を押すかのように、由紀が耳元で囁きかけてきた。

体験入部。もしくは仮入部。

学生が部活動などに入部する際に、その部が本当に自分の思っているようなものかどうかを、確認するために行う活動。

「：：」

ナオは考えた。

それなら別に、そんなに嫌がる必要もないのかもしれないと。

チア部自体に対しては、マイナスな感情はほとんどない。

それに、身体を動かすこと自体は基本的に好きだ。

体型の問題でバレエは辞めているけれども、踊ることが嫌いになっただけでもない。

というより、由紀に誘われた時点でチアダンスに対して興味が出てきてしまった。

そしてなにより、幼なじみの真人のひと言がかなり効果的だった。

『ナオが応援してくれたら俺も嬉しいし』

脳内で彼のセリフがリフレインする。

そしてその言葉が、彼との間にあった過去の出来事を思い出させた。

膝の故障でサッカーができなくなり、閉じこもっていた真人。

そんな真人に寄り添い立ち直らせ、部屋から出してリハビリに取り組ませて、医者も驚

くほどの速度で膝の故障を完治させた彼女のはじめての応援の体験。

恋人と言えるような関係にはならなかったが、彼女にとって彼はやはり特別な存在。

そんな彼を、また応援することができると。

しかも今度は挫折からの立ち直りなどではなく、純粹にフィールドに向かって懸命に努

力する彼の背中を。

「じゃあそれで……」

「ハイ決まり！」

その瞬間、ナオのチア部への体験入部が決まった。

彼女の友人である、由紀の思惑通りに。

だがまだ彼女は知らなかった。

彼女の学校のチア部が、どんな活動をしているのかを。

友人が誘ってきたチア部が、どういう手段で運動部の選手たちを奮起させているのかを。

彼女が入ろうとしているチア部の応援が、どんなものなのかを。

それを彼女は、体験入部という形で知ることになった。

第一部 体験入部へ応援するってそういうこと！？

ケース1…野球部の応援（高松由紀の場合）

「GO！ GO！」

チア姿の女子たちが、グラウンドの片隅で一列に並んで声を出している。手にはキラキラと光を反射する金色のポンポン。

ブルーの揃いの衣装は上下とも丈が短く、お腹もへそも太ももバツチリと周囲の耳目に晒されていた。

下校中の帰宅部の男子たちは、その様子をチラチラと横目で見ていた。チア部の女子たちは、当然のことながらその視線には気づいている。

体験入部中の新生たちはやや恥ずかしがりながら、そうではない上級生たちはどこか見せつけるようにしながら、曲に合わせて身体を動かしヒラヒラとスカートの裾を翻していた。

そしてそんな中に、高松由紀の姿があった。

「GO！ FIGHT！ WIN！」

友人である浅井ナオを巻き込み、一緒にチア部へと体験入部した彼女。彼女は、このチア部がどんな部なのかということの詳細に知っていた。知った上で、チア部への本入部を希望していた。

（身体を使った応援ができるなんて、なんて素敵な部活なんだろう）

由紀は、セックスが好きだった。フェラチオが好きだった。手コキが好きだった。足コキも好きだった。アナル舐めも好きだし、顔面騎乗も好きだった。

由紀は自分の好みの男性……というか男の子を誘惑して、気持ちよさに翻弄されるその顔を見るのが好きだった。

由紀は、童貞専門のヤリマンだった。

とはいえ、誰にでもやらせるわけではない。

というか、彼女のお眼鏡に叶った相手にしかやらせない。

いや、やらせるというか、やる。

セックスにおいて彼女の中に受け身という態度はなく、あくまでも彼女の方から男の子を食べに行くというのが彼女にとってのセックスなのだった。

とはいえ、行為がはじまってしまえばその主導権は変化することもある。

童貞くんが一生懸命がんばって自分を攻めてくれる。そんな状況も、彼女にとっては美味しいシチュエーションでもあったのだ。

そんな彼女がチア部への入部を希望した理由。

それは、運動部の一年生たちを食い散らかしたいからだだった。

「ご、ゴォ」

そして彼女の隣には、ナオの姿が。

彼女は戸惑うような表情を浮かべながら、周りに合わせて声を出したりポンポンを振ったりしていた。

昔なじみであるナオの考えていることが、由紀には手にとるようにわかった。

(なんでもいきなり応援やらされてるの……みたいなこと考えてるんだろうなあ)

ナオがチア部の活動を誤解していることはわかっていた。

わかっていながら、由紀はそれを説明する気はなかった。

説明すればナオが拒絶することは目に見えていたし、入部さえしてしまえばあとはどうにでもなると、由紀は思っていたから。

彼女はチア部の活動が、ナオにも合っていると本気で思っていたのだ。

「浅井さんだっけ？ 声出してこ！」

そんなナオに、チア部の部長——織田マミの指導が入った。

「は、はひっ」

ビクーンと驚きで震えたナオは、若干上ずった声でマミに返事をする。

明るめの栗毛をポニーテールにしたマミ。三年生の彼女は、ナオに負けず劣らずのプロポーションをしていた。

タンクトップをこんもりと盛り上げる豊かな乳房。

ミニスカートから伸びるスラリとした両足。

肉付きはナオよりも彼女の方が若干いいようだった。

といっても、太っているわけではない。

健康的な肉付き。

ナオをスレンダー巨乳とするならば、彼女の方はグラマラス巨乳とも呼ぶべきだった。どちらがいいとか悪いとかではない。それは、もはや人の好みによるだろう。

チア部には他にも部員は何人もいたが、胸の膨らみ的には彼女たちがトップだった。それゆえマミは、ナオに目をつけたのかもしれない。

今年で引退する、自分の後継者として。

「あと笑顔もね」

そう言ってマミはナオの両頬をムニユッと寄せる。

強引に口角をあげさせられるナオ。

人によっては怒り出しそうな行為ではあったが、ナオは平気だった。

似たようなことは由紀がよくやっていたし、それに子どもころに習っていたバレエではそういう指導は日常茶飯事だったから。

「チアの基本は笑顔よ」

変な抵抗をしたり、手を振りほどこうとしないナオを見どころありと判断したのか、マ

ミの指導はさらに続いた。

グイッと顔を近づけ、自らも笑みを浮かべながらナオに笑顔の指導をする。

「笑顔が最高の応援になるのよ」

マミにつられるように、ナオの表情も笑顔になっていく。

固さのとれてきた新入生の反応にさらに笑顔を濃くしながら、マミはポンポンとナオの肩を叩いた。

そんなマミに背後から声かけられる。

「おう、チア部。今日は頼む」

「はい」

笑顔で振り返るマミ。

声をかけてきたのは、ガツシリとした体型で丸刈りの三年生。

顔見知りの野球部部长からの呼びかけに、マミは満面の笑みで応えた。

そしてそんな二人のやり取りを見た由紀の目がキラッと輝く。

彼女の待ち望んでいた野球部の応援が、まもなく開始される。その期待感で。

チア部部长のマミの号令で、ゾロゾロと移動を開始するチア部の面々。

その最後尾には、何が起きているのかわからないままのナオの姿もあった。

「今度はなんですか……」

「そりゃ応援応援♪」

やや腰が引け、遅れがちになる彼女の背を押しながらマミが野球部の部室へと部員たちを誘導する。

ナオ以外にも緊張している風の新入生の姿はあったが、彼女たちにはナオのような戸惑いは見られなかった。

どうやら、体験入部に来るような女子ならば大抵はチア部のことを知っているらしい。

正確に言うならば、知っているような女子しかこのチア部には体験入部しに来ないということなのだろう。

ナオの場合が特別なのだ。

「応援って……」

最後尾のナオが戸惑いながら部室に入り、門番のように外に立っていた野球部員によってその扉が閉められた。

部室の中では、すでにチア部によって野球部の応援がはじめられていた。

「ほらほらがんばれー♡」

「う、うっす！」

じゅぶっ、じゅるっ、じゅぶつと湿った音がそこかしこから聞こえてくる。

喜び勇んで先頭に立ち、部室に一番乗りしていた由紀は、刈りたての坊主頭も青々しい一年生男子の勃起したちんぽを貪るようにフェラチオしていた。

「なっ！」

ナオの顔が驚愕に染まった。

顔は真っ赤になり、身体は硬直する。

手にしていたポンポンは、パサリと床に落ちた。

（何やってんのこれえ！）

固まったナオの目の前で、友人である由紀は坊主頭の一年生をさらに追い込んでいく。

「んっ、んむっ、んっ、んぐっ、んっ、んんんっ」

ちゅるるっと卑猥な音を立てながら、由紀が野球部員のちんぽを吸う。

周りでは他にも何人かのチア部員が野球部を応援していたが、由紀のフェラチオが一番いやらしかった。

そしてそれはダイレクトに、しゃぶられている一年生部員の反応へと表れていた。

「ああっ、出る出る！」

五分とかからず、坊主頭の一年生は限界に達する。

宣言するや否や、由紀の了解も待たずにその口の中へと精液を放った。

ビュルルッ、ビュウウと勢いよく射精される坊主頭の一年生汁を、由紀は嬉しそうにご

くごとく飲み干した。

「んんっ♡」

鼻にかかった艶っぽい息が漏れる。

射精してもまだ収まらない若いちんぽを、由紀は口の中でいまだに弄んでいた。

(これよこれ、やっぱり童貞くんはこうでなくっちゃ)

一向に萎える気配のない童貞ちんぽ。

それどころか由紀に口の中でレロレロと舌で舐め回されているうちに、さらに雄々しく漲ってきた。

(やるじゃない！ これ、筆おろししちゃっていいのよね！)

周りのチア部員たちは、まだ準備の段階だった。

彼女だけがいち早く、次の段階に進もうとしていた。

だが……。

「高松さん、こっちもお願いね」

チア部部長のマミが、あぶれていた野球部の一年生部員を由紀の方へと押し出してきた。

女性の前で自らをさらけ出すのが恥ずかしいのか、彼は下半身を脱がされた状態でありながらも、股間は両手で隠していた。

(かわいー！)

いま啜えている童貞ちゃんぽも好みではあったが、こちらの童貞ちゃんぽも由紀の好みにジャストフィットしていた。

刈り込んだばかりの坊主頭まで真っ赤にしているところも、さらにそれを加速する。

「はーい♡ おまかせくださいーい」

啜えていたちゃんぽは口から出し、片手でシコシコと刺激し続ける。

多少は萎えてしまうかもしれないが、それは仕方がない。

そちらはあとでリカバリーするとして、とにかく今はこちらの赤面ちゃんぽだ。

由紀はあーんと口を開くと、童貞一年生の股間を隠す手ごと、その部分を口に含んだ。

「え！？」

驚く童貞一年生。

由紀はフフと笑いながら、彼の手の甲をペロペロと舐め始めた。

「あ、ううっ：：」

くすぐったくなり、その手に入った力が緩む。

当然のことながら、由紀はそれを見逃さない。

片手で器用にその手を剥がすと、あらわになった彼のちゃんぽに優しくキスをした。

「ううっ」

微細な刺激に、ムクムクと彼のちゃんぽは大きくなってきた。

面白いことに、手でしごかれていただけの童貞ちんぽの方も、再び大きく漲り始めた。
（かわいい。私がこっちのちんぽにキスしてるの見て、興奮したんだ）

由紀は手コキされている一年生男子に見せつけるように、わざといやらしく赤面男子のちんぽに舌を絡ませた。

「れる……ちゅ……れる……じゅるるっ……」

「す、げ……」

「ううううっ。なに、これ……うわあっ」

二本の童貞ちんぽが、由紀によって翻弄されていた。

一方は手で、一方は口で。

一度射精している方も、そうではない方も、童貞好きの由紀によって挿入可能な状態へとやらしく導かれていた。

「がんばれがんばれ！　ファイトー！」

ポンポンを振りながら、マミや他の身体の空いているチア部員が童貞くんたちを応援していた。

その中に一人、身動きを取れなくなっている者がいる。

それはナオだった。

（おかしいでしょ！？）

密閉された野球部の部室の中で、ナオだけが常識的な考えを持ち続けていた。

だがそれは、ここでは不要な考え。

なにしろこの学園のチア部は、運動部をこうして身体を使って応援するのがごく当たり前なことだったから。

知らなかったのは、彼女だけだったのだ。

「どうしたの浅井さん」

マミがナオに声を掛ける。

ナオは緊張と混乱で顔を青ざめながら、マミに答えた。

「どうしたのって……これ、変じゃないですか？」

「そう？　普通よ？」

「いやだって……」

「こうやって私達は、みんなを応援してあげてるの」

「おう……えん？」

「そうよ。こうして身体を使って応援してあげて、みんなに自信をつけさせてあげるの。」

春のこの時期の野球部の筆おろしは、恒例行事よ」

「ふで……おろし……」

開いた口が塞がらなかった。

ナオにとってここは、常識が通用しないアブノーマルな空間だった。

だがナオ以外の全員がアブノーマルなこの場所においては、ノーマルなナオの考え方がそれが異端となってしまうていた。

「よし一年！ 男にしてもらえ！」

「うっす！」

野球部部長の号令一下、一列に並ぶ一年生たち。

全員が童貞ちんぽを勃起させ、挿入の瞬間を今か今かと待ち構えている。

その表情には、期待と不安と緊張と欲望と、様々な感情が入り混じっていた。

「ゴム頼めるか？」

「任せて」

部長の言葉にマミがパチッとウインクで答えて、チア部の二年生——菅又亮子に指示をする。

無言で頷き、部の備品から大量のコンドームを取り出す亮子。

テキパキとその袋を破り、マミに渡していく。

「緊張しないでね。出そうだったら出しちゃってもいいから。ちゃんとあの子が童貞卒業させてくれるから、心配しないでね」

一人一人に声をかけながらコンドームを着けていくマミ。

準備を終えた一年生から、順番に由紀に覆いかぶさっていく。

「んはあっ！ 入ったあ！ 童貞卒業おめでとうっ」

「うううっ」

二年生や三年生に比べれば、まだ身体の線の細い野球部の一年生部員。

とは言っても、どちらかと言えば小柄な由紀に比べればそこそこ大きい。

中腰でお尻を突き出している由紀に覆いかぶさると、彼女の身体がほとんど隠れてしま
う。

その状態で由紀にしがみつき、野球部の一年生は本能のままに腰を振った。

当然のことながら、限界はすぐに訪れてしまう。

「んっ、くっ、うっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んっ、んんんっ！」

「くっ！ イク！」

「えっ、もう！？」

「んああああっ！」

ビクビクと震えながら、野球部の一年生は由紀の中ではじめての中出しをする。

といっても、その精液はゴムの中に貯まるだけだが。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

「んー、仕方ないけど物足りない。でもでも、まだまだ童貞くんいるものね」

「ふふふ。はい、じゃあ次の人どうぞー」

「うっす！」

マミに促され、初中出しのあとでまだ膝がガクガクしている元童貞の一年生が脇に退く。続いて順番を待っていた次の一年生が由紀に近づきお尻に手をかけた。

「がんばって挿入してね」

「いきますっ！」

ズブリと先ほどの一年生よりもやや大きめな童貞ちゃんぽが由紀の中に挿入される。

「ああんっ！ 来た…童貞ちゃんぽ、また入ってきた！」

「くうううっ！ これがセックス！ すげえっ！」

間髪入れず腰を前後に振り始める一年生。

若干右曲がりなちんぽが、由紀の中からトロトロのおつゆをかき出すように動いていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ…いいよ、いい。すっごく元気…できてる、できてるよ、上手にできてるから…そのまま…ああああっ。そのまま気持ちよくなっ
てえ！」

「ううううっ！」

ぐっちゅんぐっちゅんと卑猥な音が、由紀と野球部一年生の接合部から漏れてくる。

そこを食い入るように見つめながら、順番待ちしている童貞一年生たちは自分のちんぽ

を揉んだりこすったりしていた。

「すげえ……」

「ホントに入ってる……」

子どものころから野球ばかりしていた彼らにとって、セックスというのは異世界のできごとだった。

もちろんいつかはすることになるだろうと夢想くらいはしていたが、そこに至るまでの過程なんかは想像すらできていなかった。

それが今、目の前で行われている。

A Vですらほとんど見たことのなかった彼らに、凝視すると言う方が無理な話だった。

「あっ！」

その中のひとりが、悲痛な声を上げる。

マミはすぐに何が起きるかを察知し、その一年生のもとに駆けつけた。

「ぱくっ！」

「ううっ！」

素早くコンドームを外し、童貞一年生のギンギンに固くなった勃起ちんぽをマミが啜え
る。

そしてその瞬間一年生は限界を超え、マミの口の中に青臭い童貞汁をたっぷり吐き出

した。

「くはあ……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ」

「んくっ……んくっ……んくっ……ふう。ゴムの中でイッチャウよりも、ずっとよかったですよ？」

「は、はい……」

パンパンと背後から童貞ちゃんぽに突かれながら、由紀はママのその様子を見ていた。

「いいなあ、私も童貞汁飲みたかったなあ」

「ふふふ。高松さんは下のお口で味わってるじゃない」

「それはそうなんですけどお」

童貞なりに自分から意識が離れていることにヤキモチを焼いたのか、由紀に挿入していた一年生の動きが激しくなった。

「んああんっ！　すごい……キミ、ホントにすごい……これ、はじめてなの？　はじめて

なんだよね？　はじめてのセックスなのに、こんなに激しくできるなんて……あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ」

彼の望み通りに、由紀の意識はすぐに挿入している童貞くんのところへと戻っていった。そんな様子を眺めながら、ママは射精してしまった童貞くんコンドームを着け直している。

「大きくして待っててね。キミの番もすぐにくるから」

「は、はい」

「んっ、くっ、うっ、ふっ、んっ、ふっ、んっ、んんんっ！」

がんばる童貞くんを翻弄されている由紀。

ただし、がんばっている方の童貞くんも由紀の中の気持ちよさに翻弄されていた。

「くはあっ…はっ、はっ、はっ、はっ、うっ、うううっ！」

歯を食いしばって気持ちよさに耐えている一年生。

その一年生の背後に、亮子が立つ。

そして耳元で囁いた。

「我慢しなくていい。気持ちよくなったら、中で出しちゃって」

言いながら、一年生の耳を軽く囁んだ。

「くうっ！」

ちょうど耳が弱点だったのか、それともはじめての感覚に不意を打たれたのか、ともかく挿入していた童貞一年生は絶頂をこらえきれなくなった。

「あっ、あっ、あっ…出てる。また私の中に…あああああ」

コンドームの中に射精される感覚に身を震わせながら、由紀もまた小さなオーガズムに身を任せていた。

「はいじゃあ次の子ー」

右曲がりちんぽの元童貞くんがフラフラと場所をゆずる。

続いてその場所に立ったのは、先ほど暴発してしまったやや小柄な一年生だった。

「お、お願いします」

「がんばってね」

「はいっ」

小柄な童貞一年生が由紀のおまんこに自分の勃起ちんぽを押し当てる。

狙いが外れないように、マミがその腰を誘導してくれた。

「ここだよ。ここにキミのおちんぽ入れるの。できるよね？」

「が、がんばります」

背後を振り返りながら、次の童貞ちんぽが入ってくるのを待ち構える由紀。

押し当てられたちんぽが自分のピラピラを押し開いてくる感覚に、思わず小さく声を漏らした。

「おっ……」

それは意外な喜びだった。

パツと見の身体の大きさがさっきの一年生よりも小さかったために、ちんぽの方もそうだろうと思ってしまっていたのだ。

だが違っていた。

彼のちんぽは、長さ自体はそれほどでもなかったが、太さが違った。

二人目の一年生よりも、ひと回り。

最初の一年生と比べれば、ふた回り。

由紀の指で、三本から四本ほどの太さをもっていた。

「んんっ……これ、すごい……私のを、メリメリ押し開いて……あっ、あっ、あっ、あっ……いい、これ……んんんっ！」

ズンツと暴発一年生が最後のひと突きを加えた。

彼のちんぽが、根元まで由紀の中に収まる。

あまりの太さに、由紀は口をパクパクさせていた。

「おめでとう。これで童貞卒業だね」

「は、はい」

パチパチとマミが拍手しながら彼を褒め称える。

マミに少し遅れて周囲の野球部の上級生たちやほかのチア部の部員たちも、彼を拍手で褒め称えた。

「あとはそのまま動いて射精してね。ゆっくりでもいいし、激しくでもいいから、好きなように動いてみて」

「わかりました」

ぐっちゅ…ぐっちゅと、最初はゆっくりと動き出す極太ちんぽの童貞くん。

「ん…あ…あああ…あ、あ、あ、あ、あ、あ」

自分の内側が引き出されるような、さっきまでとはかなり違う快感に由紀はうっとりとした表情を浮かべていた。

「いいよ…気持ちいいよ…んっ、んっ、んっ、んっ…キミの太いちんぽ、すごく…あああ…すぐく気持ちいい」

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ…ううううっ」

極太童貞ちんぽくんが、唸り声を上げた。

限界が近いのかとママがちらりと彼の顔を覗き込んだが、どうやらそうではなかったようだ。

「は、激しくいきますっ！」

「んふううううっ！んっ、ふっ、んっ、くっ、うっ、うううううっ！」

それまでのゆったりとした動きが嘘のように、極太童貞ちんぽくんは猛烈に腰を動かすはじめた。

確かに彼は小柄だった。

だがそれは、彼の身体が鍛えられていないというわけではなかった。

彼の身体は鍛え上げられ、みっしりとした筋肉に包まれていた。

一年生ながら鍛え上げられたその筋肉を使って、彼はそれまでの二人とは比べ物にならないほどの激しさで由紀を責め立てた。

「んはあああっ！ なっ！ なに、それ……んんんっ！ そんなこと、あっ、あっ、あっ、あっ、そんなこと……できたの？ すごい……あああっ。すごい激しい……い、いい……そんなにされたら……私……私……あああっ！ 童貞くんのちんぽで……あっ、あっ、あっ、あっ……あっ……イッちゃううううっ！」

「くうううっ！！」
極太童貞くんぽくんが、由紀の一番深い部分……彼の到達できる一番奥で、童貞汁を解き放った。

「あ、あ、あ……出て……出て……童貞くんの精液、私の中で……」

自らも絶頂しながら、由紀はゴム越しに極太ちんぽくんの精液を感じ取っていた。

これがナマだったらどれほど気持ちよかっただろう。

そんな危ないことを想像しながら、彼女は今日食べた童貞くんたちのことを思い出していた。

「おめでとう！ これでお前たちも全員男だな！」

「はいっ！」

小一時間後、野球部の部室には童貞は一人もいなくなった。

さすがに疲労の色が見える由紀と、その世話をする亮子。

由紀の他にも何人か野球部の一年生の相手をしたチア部員はいたが、その中でもやはり由紀の童貞食いの人数はダントツだった。

「全員整列！」

野球部の部長が一年生を並ばせる。

下半身むき出しのまま、壁沿いに並ぶ元童貞たち。その表情は誇らしげで自信に満ち溢れ、チア部の応援前とはまるで別人のようだった。

「お前ら全員を男にしてくれたチア部のみなさんに礼！」

「ありがとうございます！！！」

部長の号令に合わせて、無数の坊主頭がサッと小気味よく下げられる。

それに応えるように、チア部のメンバーも部室の扉側に整列した。

そしてチア部部长であるマミの号令でクラブが始まる。

「GO！ FIGHT！ WIN！」

クラブに合わせてコールをするチア部のメンバー。

疲労困憊だった由紀ですらも、野球部に向けてエールを送っている。

こうしてこの日の、野球部の応援は終わった。
*
*
*
(続きは本編で)